

たけべ特別栽培農産物研究会講習会資料

(雄町を中心に)

平成26年8月5日

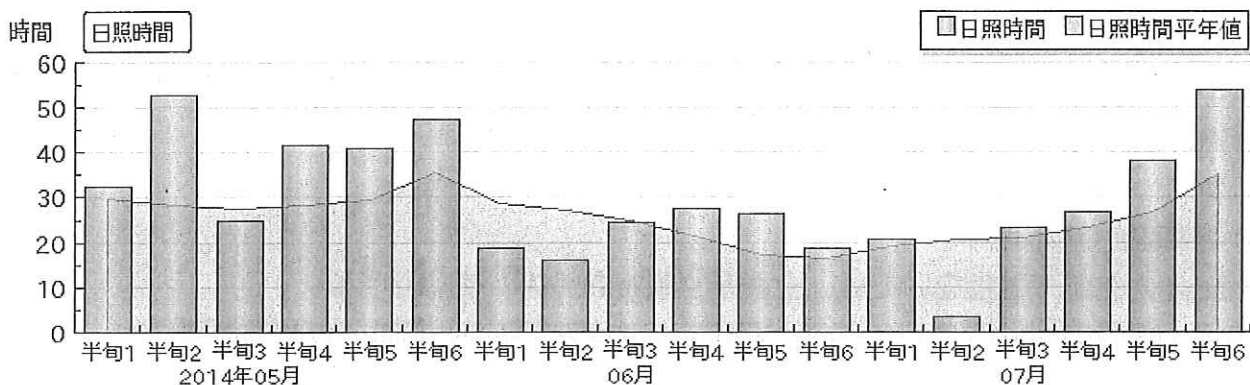
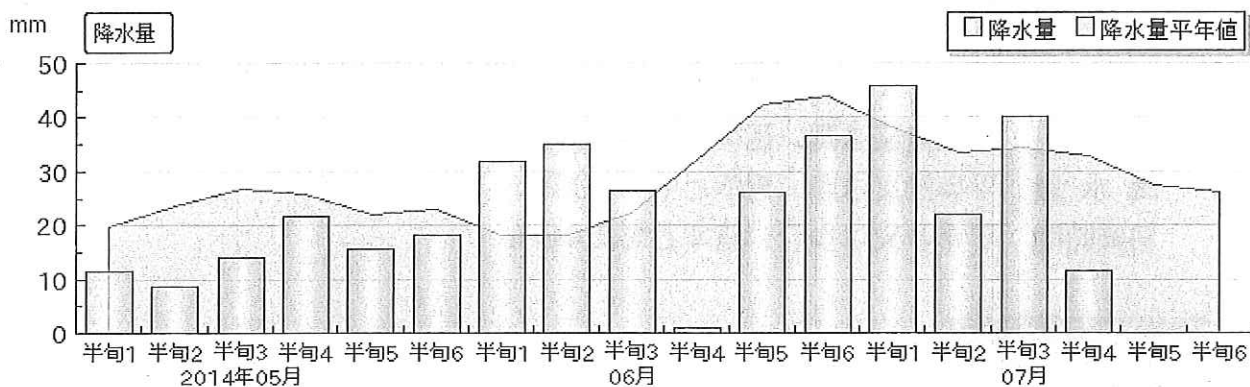
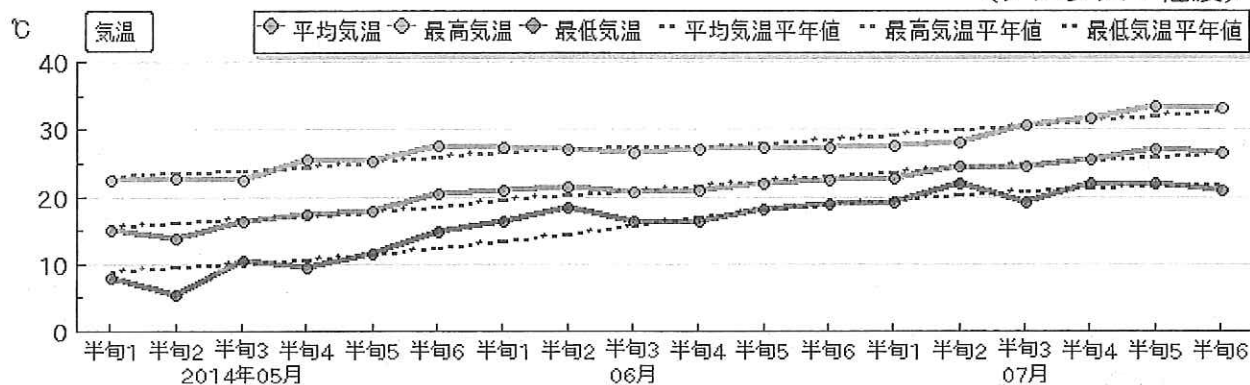
岡山農業普及指導センター

1 気象経過と生育状況

(気象経過)

4月～5月中旬は気温が概ね平年並～やや低い傾向であったが、5月下旬～6月上旬はやや高く、6月中旬以降は平年並で推移している。5月の降水量はやや少なく、6月4日頃に梅雨入り（平年より3日早く昨年より8日遅い）し、まとまった降雨がみられたが、6月中旬以降はやや少ない傾向で推移した。7月に入り一定の降水量がみられ、また、台風8号が接近（7月10日頃）したが、大きな影響はみられなかった。7月20日頃梅雨明けした（平年より1日早く昨年より12日遅い）。8月に入り、台風12号、11号の影響で曇雨天が続いている。

(アメダス：福渡)



(生育概要) (品種全般)

育苗については、低温による生育不良やカビの発生、高温による焼けやムレと思われる症状等が一部でみられたが、概ね順調に行われた。

移植後の生育も、全般に茎数はほぼ確保されており、概ね順調に進んでいるものと思われる。ただし、7月上旬頃からいもち病が散見されていること、また、7月30日にイネいもち病の注意報が発表され、8月に入り曇雨天が続いていることから注意が必要である。

<雄町生育データ> 農業気象情報調査事業定点ほ場(雄町、北区御津宇垣)

調査日	6/16			7/17			7/31		
調査項目	草丈	茎数	葉色	草丈	茎数	葉色	草丈	茎数	葉色
H26年値	-	85	-	55.2	329	37.8	75.1	313	33.8
平年値	-	89	-	67.9	398	35.9	83.5	348	33.4

※6月15日移植 草丈：cm、茎数：本/m²、葉色：SPAD値

<中国地方 3か月予報> (平成26年7月25日 広島地方気象台 発表)

	概況	気温	降水量
8月	平年と同様に晴れの日が多い	平年並(40%)高い(40%)	平年並(40%)
9月	天気は数日の周期で変わる	平年並(40%)	平年並(40%)
10月	天気は数日の周期で変わる。平年と同様に晴れの日が多い見込み	平年並(40%)	平年並(40%)

<中国地方 1か月予報> (平成26年7月31日 広島地方気象台 発表)

気温：平年並又は高い確率ともに40%

降水量：平年並又は多い確率ともに40%

日照時間：平年並又は少ない確率ともに40%

2 今後の栽培管理

(1) 水管理

1) 土用干し後

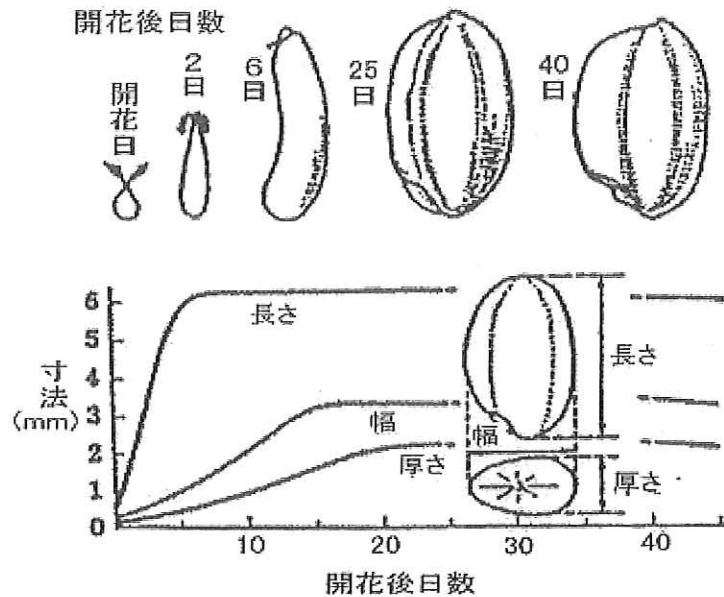
- 徐々に湛水し、その後間断かんがいを行う。穂ばらみ期～穂揃い期頃は茎葉からの蒸散も多く、水不足が幼穂伸長にも影響するので湛水状態とする。

2) 出穂後～落水期

- 根の活力を低下させないため、出穂後は間断かんがいを励行する。
- 用水が豊富な地域に限られるが、猛暑年には登熟期のかけ流しかんがいをを行う。

- ・ **早期落水に注意!**玄米の肥大は出穂30日後頃まで続くため、**落水の目安は出穂30日後**。ただし、中干しの程度やほ場の排水性なども考慮し調整する。
 - ・ 落水が早すぎると登熟後半で脱水症状となり、未熟粒や胴割米等が発生しやすくなる。
 - ・ 落水後にはほ場が乾きすぎるような場合は、可能であれば走り水を行い土壌水分を維持する。
- ※雄町は特に土壌還元に弱いので、水温の上昇による根傷みなどに注意する。

図 玄米の外形発達経過



3) その他 (台風対策)

台風が来る前は深水管理とし、株もとの揺れや倒伏を防止する。

台風通過後はイネが弱っているので、数日間湛水状態とする。

(倒伏して穂が地面についている場合は、穂発芽を防ぐために落水)

(2) 施肥 (穂肥)

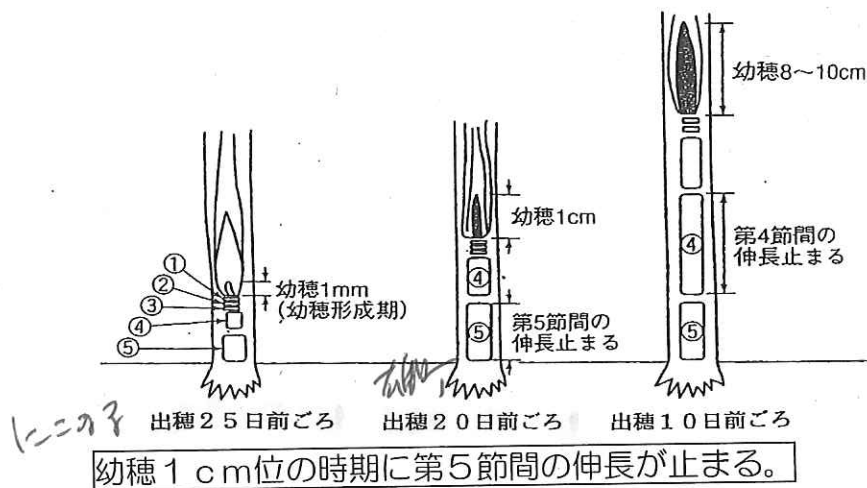
- ・ 穂肥の施用時期が早いと下位節間が伸びて、稈長が長くなり倒伏する。
- ・ 穂肥は、葉色の低下を確認し施す。
- ・ 穂数、籾数が多くなりすぎると、粒の揃いが悪く、くず米も多くなるため、心白の発現が悪くなる。
- ・ 玄米中のタンパク含量を高めないために、出穂後の施肥は行わない。

雄町

○施肥例 (10a当たりの施肥量)

(たけべ特別栽培農産物研究会暦より抜粋)

・ 有機質肥料施肥例 有機653 出穂25日前頃 30kg/10a



- ・葉色が濃い
- ・草丈、茎数が多い
- ・下位節間が長い
- ・日照不足（曇雨天）

⇒ このような場合は、時期をやや遅めにし、量も少なめにする。

○倒伏基準

植

(稲作技術指針より)

- 最高分けつ期（7月20日～31日頃）の
 - ・茎数 400本以上/m² (株間18cm→22本)
 - ・草丈 80cm以上
- 穂肥前の葉色 37以上 (SPAD値) カラースケール4.5以上
- 稈長 120cm以上

○生育量の目安（茎数および穂数はm²当たり本数） (稲作技術指針より)

最高分けつ期の茎数	穂数	草丈	稈長
400本程度	220~240本	130cm以下	120cm以下

○葉色 (SPAD値) 推移の目安 (稲作技術指針より)

最高分けつ期	幼穂形成期	穂揃期	出穂後20日
~42	35~37	40程度	36~37

(3) 病虫害防除

<本年の発生状況> (品種全般)

○いもち病 葉色の濃いほ場を中心に葉いもちが発生。穂いもちへの移行に注意。

葉いもち感染好適日 (病虫害防除所プラスタムデータより抜粋、7/31現在)

岡山 (アメダスポイント): 6/22、6/25、7/7

福渡 (アメダスポイント): 6/22、6/30、7/7、7/11

<葉いもち>

- ・補植用の置き苗は伝染源になりやすいのですぐに除去する。
- ・基本的には長期残効型の苗箱施用剤で予防する。
- ・葉いもちの発生が心配される場合は発病初期までに薬剤を散布する。
- ・昨年、県下でストロビルリン系殺菌剤（嵐、イモチエース、オリブライト、アミスターなど）耐性イネいもち病菌発生が確認されているので、使用したにもかかわらず発生した場合は、直ちに他系統の薬剤で防除する。
- ・曇雨天が続くと発生が増加する場合があるので、早期発見、早期防除を心がける。
- ・発生がみられるほ場では、窒素の施用量を控える。

<穂いもち>

- ・出穂直前と穂揃期の2回、薬剤を散布して感染を防ぐ。

○紋枯病 高温で茎数が多くイネ株内の湿度が高い場合に発生が多くなるため、常発田や高温が継続する場合には8月上中旬に防除を検討する。

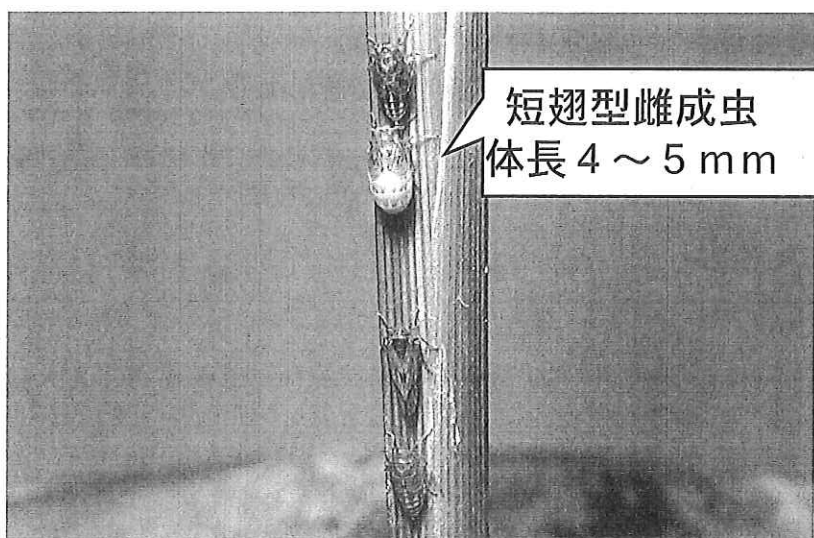
○コブノメイガ 現時点での発生程度は平年より低く、今後もやや少ない見込み。

○イネアオムシ 発生ほ場が散見。

○ウンカ類 昨年多かったトビイロウンカは平年並と予想。7月下旬時点で確認されず。

<トビイロウンカの防除目安>

- ①中生、晩生品種で、8月中旬～9月上旬に短翅型雌成虫が株あたり0.2頭以上いる。
- ②幼虫発生最盛期
- ③収穫1か月以上前に10頭以上発生している株がある。



- ・湿度を好み、株元に集まる。
- ・毎年大陸から気流に乗って飛来するため、飛来時期や数が変動する。
- ・飛来後の天候により増殖パターンが変動する。
- ・吸汁された稲株は黒いすすがつく。

<病害虫発生予察> (岡山県病害虫防除所 平成26年7月31日発表)

病害虫名	発生時期	発生量	病害虫名	発生時期	発生量
葉いもち(中生晩生種)	—	多	セジロウンカ	—	少
穂いもち (極早生早生種)	—		トビイロウンカ	並	並
紋枯病	—	やや少	イネツトムシ	—	やや少
白葉枯病	並	並	コブノメイガ	—	やや少
穂枯れ (早生中生種)	—	やや少	カメムシ類	—	やや多
ニカメイガ	並	並			

<病害虫防除> ※延べ成分使用回数に留意し最低限にとどめること
(たけべ特別栽培農産物研究会栽培ごよみより抜粋)

【粒剤例】 スタークル粒剤 3kg/10a

参考 (JA岡山暦 (雄町北部エリア) より抜粋)

【粒剤例】 (8月上旬 リンバー粒剤 4kg/10a)

↓
穂ばらみ期 イモチエーススタークル粒剤 (収穫35日前まで) 3kg/10a
又は コラトップトレポン粒剤 (出穂5日前まで) 4kg/10a

農薬の安全使用について

- ・ 農薬の使用に当たっては、安全使用基準を必ず確認しましょう。
- ・ 散布時には周囲の作物にかからないように飛散防止対策を行いましょう。
- ・ 使用状況をきちんと記録し、大切に保管しましょう。

<< 注 意 報 >>

岡 病 防 第13号

平成26年 7 月30日

各 関 係 機 関 長 殿

岡山県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報の発表

病虫害発生予察注意報第2号を下記のとおり発表したので送付します。

平成26年度病虫害発生予察注意報第2号

平成26年 7 月30日

岡 山 県

病虫害名 **イネいもち病(葉いもち、穂いもち)**

1. 発生が予想される地域

県内全域

2. 発生が予想される時期

8月上旬以降

3. 予想される発生量

多

4. 注意報発表の根拠

(1) 本田での葉いもちの初発生時期は平年(6月第5半旬)並の6月第4半旬で、その後の病勢進展は平年並であったが、7月第5半旬に急速に病勢が進展した。

7月24~25日の巡回調査(30地点、90圃場)によると、県内全域の葉いもちの発生圃場率は32.6%と平年(43.8%)よりやや低いものの、発生程度「中」^{*}以上の圃場率は12.4%と平年(8.1%)よりやや高く、特に中部地帯で16.7%(平年8.7%)、北部地帯で13.3%(平年3.4%)と高い。

^{*}発生程度「中」: 一株当たりの病斑数が11~50個認められる。

(2) 気象経過(アメダスデータ)から推定されるいもち病の感染好適条件は、6月下旬~7月中旬にかけて県下の広範囲に散発的に現れている。

(3) 広島地方気象台7月24日発表の季節予報によると、向こう1か月の気温は平年並または高く、降水量は平年並とされているものの、大気不安定な状態が続くと、にわか雨などによって病勢が進展する可能性がある。

5. 防除対策及び防除上の参考事項

(1) 既に葉いもちが発生している圃場では、表を参考に液剤又は粉剤を直ちに散布する。極早生種や早生種などでは7月下旬から出穂期を迎えているので、穂いもち防除を出穂直前と穂くび出穂期の2回行う。なお、粒剤は薬剤によって施用時期が異なるので使用方法に注意する。

(2) 最新の農薬登録情報は、独立行政法人農林水産消費安全技術センターホームページ(<http://www>)

w.acis.famic.go.jp/searchF/vt11m000.html) で確認できる。

表 主な防除薬剤（下記単剤の他、下記成分を含む混合剤）

薬 剤 名	農薬使用基準		
	使用時期	使用回数	希釈倍率・処理量
ビーム粉剤DL	収穫7日前まで	3回以内①	3～4kg/10a
ビームゾル	収穫7日前まで	3回以内①	1,000倍
ダブルカットフロアブル	穂揃期まで	2回以内	1,000倍
ブラシン粉剤DL	収穫7日前まで	2回以内	3～4kg/10a
ブラシン水和剤	収穫7日前まで	2回以内	1,000倍
ブラシンフロアブル	収穫7日前まで	2回以内	1,000倍
オリゼメートパック	収穫14日前まで	2回以内②	パック20～26個/10a
オリゼメート粒剤	葉いもち初発10日前～初発時③	2回以内②	3～4kg/10a
コラトップ粒剤5	葉いもち初発10日前～初発時④	2回以内⑤	3～4kg/10a
コラトップジャンボP	葉いもち初発20日前～初発時④	2回以内⑤	パック10～13個/10a
★イモチエース粒剤	収穫35日前まで	1回以内	3kg/10a
★オリブライト1 ^キ 粒剤	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで	1回以内	1kg/10a
★オリブライト250G	出穂10日前まで ただし、収穫45日前まで	1回以内	250g/10a

★：QoI剤（本県の一部地域で耐性菌が確認されている。平成25年度植物防疫情報第2号、第6号参照。）①：育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内。②：育苗箱への処理及び側条施用は合計1回。③：穂いもちには出穂3～4週間前、収穫14日前まで。④：穂いもちには出穂30日前～5日前まで。⑤：育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内。

（参考）この情報は、農林水産総合センターホームページでも公開しています。

アドレスは、http://www1.pref.okayama.jp/soshiki/kakubu.html?sec_sec1=22